

〈学術研究集会傍聴記〉

第74回日本体力医学会大会傍聴記

竹下 知成*

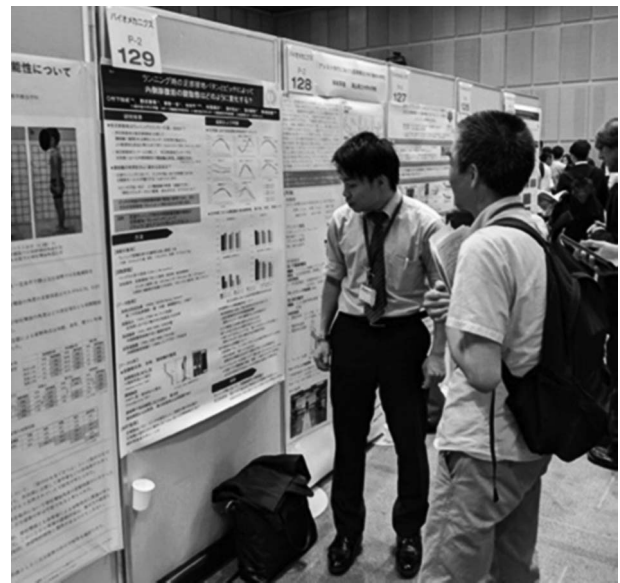
Tomonari TAKESHITA*

2019年9月19日から21日まで、つくば国際会議場で開催された第74回日本体力医学会大会に参加した。本学会のテーマは「元気な人と社会を育むスポーツ医科学の挑戦」であった。そのテーマを体現するように、社会に根差したスポーツ医科学について活発に議論が交わされた。今大会では研究発表、トークセッション、ワークショップ、シンポジウム等の企画が行われた。

特に初日に大会長である田中喜代次先生を中心に執り行われた「生涯にわたるスポーツ活動への提言」シンポジウムは、超高齢化社会を迎える日本においてスポーツがどうあるべきかを考える機会となった。研究活動をいかに一般に落とし込むかが重要であり、その方策について熟慮する必要があると学んだ。同時に、今後スポーツ健康科学が学際的な学問として発展することが重要であると実感した。

一般演題発表においては、東京大学大学院の久保啓太郎先生による「伸張-短縮サイクル運動の繰り返しの関節スティッフネス低下の機序」の発表が印象的であった。ジャンプ中の足関節スティッフネス(硬さ)は疲労によって低下するが、その要因は筋のスティッフネス低下が原因である可能性が示唆された。筆者が行うランニング研究に関連する内容であるため、参考にさせて頂きたく思う。

筆者は、筆頭著者として「ランニング時の足部接地パターンとピッチによって内側腓腹筋の腱動態はど



のように変化する？」という演題についてポスター発表を行った。今回の発表では、ヒトが有する「バネ」に着目し、走行中のアキレス腱動態が足の着き方(足部接地パターン)とピッチによってどのように異なるかを検討した。当日はバイオメカニクスを専門とされる方々からランニングの指導者の方など、多岐に渡る分野の方から質問および意見を頂くことが出来た。

今回の日本体力医学会大会は自身の研究をより深化させ、またスポーツ健康科学の研究者としての在り方を考える貴重な機会となった。本学会で拝聴した数々の研究発表、自身の研究発表に対する様々なアドバイスを元に、一層研究活動に励む所存である。

本学会大会には2019年度学内共同研究費の一部を用いて参加させて頂きました。

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程1年
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University